

「続膝栗毛」シリーズ三編について

中山尚夫

十返舎一九の「続膝栗毛」シリーズ三編（『木曾街道続膝栗毛』三編）二冊は、文化九年（一八二二）、大坂の河内屋太助と江戸の西村源六・鶴屋喜右衛門・村田屋治郎兵衛・永楽屋西四郎から出された。このシリーズ当初から（初編以来）の版元たちである。

冒頭に自「叙」があり、文章の所々に俳画的簡略画が言辭の代わりにはめ込まれている。いわば絵文字が混じっているというべき文章である。内容は、例によつての簡単な自虐的挨拶であるが、叙末は「春の日のひよろ長き反齒の親仁また例の他分をつくす〔花押〕」とする一九自らが自身の容貌に触れている一文である。一九が自身の容貌・相貌について記しているのは画した資料は極めて少ないが、『戯作者六家撰』（安

政三年刊）や自作（喜多川月磨画）の『滑稽しつこなし』（文化三年刊）中の一九を描いた画像との一致が見られ、ほぼ正確な記述と考えられる。いずれにしてもこの一文は少しの誇張や謙遜はあるかも知れないが、貴重な資料である。

続いて「附言」がある。三項目から成り、一番目は、本作の趣向について述べたもので、一九が「去年上阪の道すがら」に直接目にした出来事や滑稽を描いたとするものである。「去年上阪の道すがら」とは、文化八年（一八一）二月から六月までの上阪を指し、その帰路は木曾街道を利用したらしいので、この間のことを述べたものと推定する（拙著『十返舎一九研究』一七二頁）。二番目は項目全文を左に掲げる。

此編は芸州宮嶋より。中国筋。播磨名所巡のおもむきを。

著すべきなれども。板元の望みにまかせて。すぐさま木曾路とこち附たり。猶作者去年さいわるに上阪の刻。播州めぐりせし事なれば。此紀行は別に表題をかへてあらはすものなり。因而此巻は。大津駅よりはじまり。草津追分より。中山道柏原宿にいたりて終る。

「続膝栗毛」初・二編は、在阪中の弥次郎兵衛・喜多八の二人が、讃岐の金毘羅と安芸の宮嶋を参詣した滑稽を描いたものであるから、三編はそれに続く大坂への帰路すなわち播磨路を描くのが順序だ、と自分は考えるが、板元は、大坂から江戸への帰路すなわち木曾街道を舞台にせよ、と言うので、それに従う、という趣旨の文章である。一九自身がどの程度強く主張をしていたかは不明であるが、板元（達）にとつて「続膝栗毛」執筆・刊行の意図は、あくまでも二人の主人公を江戸に戻すこと、その舞台を木曾街道として滑稽を描くこと、ということに あつたことがよく分かる。また、一流の戯作者となつていた一九自身もこれに同意した、ということとは、彼自身の意図も板元（達）のそれと大きな差異はなかつたと考へるべきであらう。

一方、播磨路の滑稽はどうなつたか、と言へば、当面「続膝栗毛」三編への記述はなくなつたものの、本三編「附言」に続いて「播州廻／滑稽 春旅鴉 十返舎著 全二冊近刻 作者みづから此地名所古跡を巡りし中にさまざま聞せしめづらしきことをあらはし猶膝栗毛の趣に洒落たる本なり」との予告がある。その内容こそが「膝栗毛」三編に描こうとしたものであつた、と解釈していいのだからと思う。ただし、この「春旅鴉」なる本の現存はもとより刊行の事実さえも確認できない。少なくともこの書名での出版自体がなかつたと見ることは不可能ではない。しかし、『方言／修行金草鞋』三編（文化十年刊）十四丁表に「当年ばんしうめぐりのひざくり毛大坂書林よりうり出し申候何とぞ御求御高覧可被下候これは作者の口上さやう」とあることを信ずれば、文化十年に「播州巡り膝栗毛」が大坂の版元から出されたことになる。「春旅鴉」の書名ではなく別の名で出されたのである。筆者はかつて『続膝栗毛二編追加』上下二巻を翻刻、解題を付して上梓した（『古典文庫』670、平成十四年九月）。その底本は弘化四年（一八四七）刊の重版本であつたが、序

文は、一九自序で「統藤栗毛播州廻叙」とあり、叙末近くでは「かの弥次良兵衛喜多八が。芸州宮嶋より。帰路の滑稽をこゝにあて、。統二編の追加とし。名づけて播州巡りといふ事しかり」と結び、叙末は「文化癸酉春 十返舎一九誌」とあるので、文化十年にこの統二編追加（播州巡り）が書かれたことは間違いないところである。その附言には、

統藤栗毛二編は安芸の宮嶋にいたりて終り三編より直に中山道へうつりたり此播州の地は古戦場の旧地多く又神社仏閣にも上古の遺風ある所あまたありて壯觀とするに絶たり就中風流の景地他国にすぐれたることをいかゞして此地を除中山道をたゞちにせしこと残懷のいたりならんと浪国の書肆が投めによりて今此巻を編るものなり因て三四の篇におくれたれば二篇追加となすものならずと、播州巡りを「統藤栗毛」に入れる意義を、あたかも「統藤栗毛」三編の附言を意識した如き書きぶりですべている。また、同三・四編に次いで出版であることも確認できる。下巻の本文末尾には「是よりさきざきの滑稽腹をかゝへる事多しそは木曾道中藤栗毛三編へつき申候間御求御らん可被

下候」と、二編の追加であつて、三編の前に入るべき編であることが、繰り返して述べられるのである。こうした経緯を見れば、「春旅鴉」として予定された播州巡りの紀行作品は「統藤栗毛二編追加」と題されて、文化十年に大阪の河内屋太助・河内屋嘉七（共に重版本の奥付）から出版されたと言えそうである。

さて、「統藤栗毛」三編に戻ろう。附言の第三項目は、「仮初の伊勢参宮より。おもひの外長旅となりて。宮嶋にくれゆく春をおしみ。卯月の初旬より。漸く帰路におもむきたり。是より木曾路は夏の部と見給ふべし。」である。弥次喜多の東海道中の流行が、予期したものではなかったことが、この記述からもくみ取れる。

附言に続くのは石山寺の遠景を描いた口絵。画者は一九の友人喜多川月麿。「石山観音」と題する一九による説明文を載せるが、その末尾に「予去年此ところの松屋といへるにとまりたる」とあり、前年上阪の折りにここに泊まったことがわかる。続く口絵は、喜多川式麿が描く紫式部肖像画と「紫式

部所持源氏物語書写硯于世謂石山形硯」画と「石山寺源氏間紫式部影讚」。次は「通俗巫山夢 よみ本全五冊 十返舎一九 作 勝川春亭画」「大念仏／靈宝 連理隻袖 同全五冊 同作 浪花芦洲画」「浪花／靈場 大師めぐり 同全三冊 同作」三点を正月礼装姿の一九が「右目錄の本は大坂滞留のうち急作に御座候則かの地の書林より出版うり出し申候何卒御求御高覽被下候やう奉願上候」の挨拶とともに告示している画であり、同じく式麿の筆による。さらに続いて、板元の挨拶が記されている。すなわち「右之外新板著述数多有之候ども作者去年上坂いたし殊之外長滞留いたし漸益前帰国仕候故当春之間二合かねうり出しがたき所数々御座候追而差出し入御覽可申候評判よろしく奉願上候 以上 板元」は、一九の動静を知らせるものである。

三編は、本文に入る前に以上の事柄が付されている。序・附言は多くの編に見られるところであり、殊更の感はないが、附言の内容や随所に見られる一九や板元の断り書きなどから、この三編が「続膝栗毛」シリーズにおいて、その実質的初編に相当すると見ることができよう。本文冒頭は「笑ひの中に

刃を研といしはぐつと昔のこと。いやましにおさまれる御代のありがたさは、一腰の脇指さへ拔ぬやうにとつめをかひ」は「膝栗毛」初編冒頭「富貴自在冥加あれとや、営たてし門の松風、琴に通ふ、春の日の麗さ、げにや大道は髪のごとしと、毛すじ程も、ゆるがぬ御代のためしには、鳥が鳴吾妻錦絵に、鎧武者の美名を残し、弓も木太刀も額にして、千早振神の広前に、おさまれる豊津国のいさほしは、」とよく似た表現と言えよう。ちなみに「続膝栗毛」初編（金毘羅参詣）の冒頭は「抑讚岐国象頭山金毘羅大権現と号し奉るは……」と、これから二人が向かう金毘羅権現の説明から始まり、編の冒頭としては有りがちな表現となつてはいるが、「続膝栗毛」シリーズの冒頭としては、三編の文章の方が適格であると言えよう。前記三編冒頭部の後「人のこゝろの長旅に足曳の山留して、朝もよむ木曾街道を心ざし、今や東都へ帰り道なる弥次郎兵衛きた八は、播州路よりすぐ尼が崎から神崎のわたしをこえて、山崎街道を伏見に寄宿し、あくればこゝを立出て、はやくも札の辻なる追分町にぞ出たりける。「ちよと御ことわり申上升」(去春の二編には、此兩人宮じまどまり迄をあらは

したれば、今年は備前路より播州めぐりのところ、作者思ふことあれば省略していつそくとびに、木曾かいだうをするすものなり。」とこのシリーズの構想を述べ、且つ初・二編のイレギュラー性を断り書きとして設けた続きは、まさにこのシリーズの最初というにふさわしい展開なのである。

さて、本文内容の趣向である主人公二人の滑稽は、『膝栗毛』六編までのそれと変わらずに精彩を取り戻している。『膝栗毛』は、江戸っ子である弥次喜多が地方（田舎）の人たちを下に見て仕掛けた悪戯が、すぐに露見して逆にやり込められるという逆転の発想による滑稽が、どこにおいても精彩を放ち、それ故に同じ趣向の滑稽の繰り返しであつても、屈託なく笑える可笑しさが人気を呼んでいたのであるが、六編後半から七・八編にかけて、場面が京都・大阪に移ると、それまでの上位にいる江戸っ子が下位に位置する田舎人から逆にやり込められるという笑いが通用しにくくなったのである。すなわち、弥次喜多が、京都・大阪人の上位に立てず、二人がやり込められるという滑稽が、滑稽として通用しなくなつて

しまつたのである。江戸に対する上方の意地が当地においては勝つていたという現実と、作者一九における特に京都に対する違和感があつたという現実的事情が背景にあつてのことだと言える。「続膝栗毛」三編ではその傾向が減じて、地方へ向かう、あるいはやや上方の都市から離れた地方を相手にした時の、弥次喜多の悪戯ふりとそれを逆手に取る人々々が繰り広げる滑稽が戻つてきたのである。

上巻における、膳所で子どもが落とした金を使って瀬田の茶屋で飲食したところその茶屋の俸が落とした金であつたことが分かり却つて散財をした、という滑稽、草津の宿屋での下女をめぐる二人の滑稽と失敗は、いずれも『膝栗毛』で見た二人の滑稽や失敗と同質の低俗な笑いであり、この作品の流行を支えた笑いが戻つたというべき箇所である。

下巻、愛知川宿はずれでの、畑村の伊五右というおやじに宗高院和尚とともに二人が吸筒に入った酒を振舞われる場面、この吸筒、おやじが京都四条の古道具屋で買ったものであつたが実は堂上方の携帯用便器「完筒」であつた、というオチがつく。携帯用便器を酒の容れものと間違える滑稽は、『南總

記行「旅眼石」(享和二年刊)中に見られる滑稽にヒントを得たものであるが、似た滑稽は『膝栗毛』四編下「七里の渡し」での失敗などにも見ることができ。また、下巻最後の滑稽は田舎芝居でのドタバタであるが、田舎芝居を滑稽の趣向とする手法は、いうまでもなく万象亭の『田舎芝居』(初版、天明七年刊)に端を発しているが、一九自身も『膝栗毛』四編上巻においても使用している趣向である。またこの場面は、『膝栗毛』三編の駿府二丁町(安倍川遊郭)で、遊客が遊女から受けるリンチを可笑しく見物していた二人と同様に、彼ら自身が話の主人公になるのではなく、客観的にその滑稽を見る、といういわば舞台回しの役割にまわった場面でもある。

「続膝栗毛」三編には、「瀬田の茶屋での滑稽」「瀬田村茶屋での失敗」「草津の旅館での一連の滑稽」「鏡山建場過ぎの川越しでの失敗」(以上、上巻)、「間宿清水鼻の木賃宿での滑稽」「愛知川宿はずれでのおやじとの滑稽話と高宮川での小野郎とのやりとり」「同上所でのおやじの吸筒失敗と滑稽」(前記)「鳥居本宿棒鼻での飯盛女郎と旅人とのやりとり」「番場宿で茶席に招待された二人の一連の失敗と滑稽」「醒が井宿で

見た田舎芝居での一連の滑稽」(前記、以上、下巻)の断が描かれている。この中で、「鳥居本棒鼻でのやりとり」と「醒が井での田舎芝居」の滑稽は、弥次喜多が直接絡んだ滑稽ではなく、二人が客観的に見ている滑稽である。前記「附言」にあるとおり、この編は文化八年の一九上阪の折りの見聞が描かれており、「草津宿での一連の騒動」「番場宿での茶席の騒動」「醒が井での素人芝居の騒動」は、一九が目当たりにした出来事だと言うのである。『膝栗毛』では見られなかった、あるいはその断りが述べられなかった、作者の見聞を素材とした話の展開あるいは作法が、「続膝栗毛」シリーズのこの編の附言で断り書きをして本文の趣向とする手法として用いられることは少し注目をしておいていいことだと思ふ。下巻本文最末尾に「作者旅行中さまざま面白き趣向貯へたれどもみな信州路にいたりての滑稽なれば此編には符しがたし因てこゝに筆をおくやがて四編にくはしくすべし」とあえて(右)内文章が□で囲まれていることがそれを物語る)断るところを見れば、地方(田舎)を舞台とした場面で二人の滑稽はさらに精彩を放つ、と宣言したようなものであり、「続膝栗毛」シ

リーズの作法の中心が江戸つ子を気取る弥次喜多と田舎人のやりとりにあるというものである。基本的には『藤栗毛』と同趣の方向性を持つことが明らかである。

以上のように、弥次郎兵衛と喜多八の滑稽ぶりが、『藤栗毛』当初のごとき精彩を再び見せ始めた「続藤栗毛」三編であるが、描かれる彼らの滑稽が前シリーズと大きく異なった点も特徴として見られる。それは、描かれる一々の滑稽場面が長い、ということである。たとえば上巻、草津の旅籠屋での一連の滑稽騒動は、上巻全体の約半分の量を占める場面である。大雨のため付近の曲川の大水や砂川の川留という設定で、二人が旅籠屋に滞在する。その間にいくつかの滑稽が用意されているのであるが、川留に関して『藤栗毛』中では大井川の川留によりやむなく岡部宿に宿泊したことが描かれているのみで、そこでの滞在ぶりや滑稽は全く描かれない。二編末尾という構成上の理由もあるが、むしろ二人の旅路を急がせるようにそこでの場面は描かれていない。

また、下巻、番場宿のさる隠居宅に招かれた二人が、華道

と茶道という彼らとは無縁の世界で滑稽を繰り広げる場面も長い。最後の醒が井宿、素人芝居の騒動場面も長い。ここで二人は騒動の傍観者であり、『藤栗毛』府中、安倍川遊郭の滑稽場面と同じ立場にあることは前述のとおりである。

このように、ことに前作『藤栗毛』と比較して、一々の滑稽場面の長さが目立つのが、「続藤栗毛」三編の特徴の一つと言えよう。以後シリーズ全般にわたってこの傾向が続くか否かは今後の問題とはなるが、すくなくとも三編においては特徴的である。『藤栗毛』の大流行の要因として、主人公二人の滑稽や舞台が「東海道」という地方であった点が挙げられることは言を俟たない。読者は、弥次喜多の笑いとともに東海道を旅するのである。読み進めてゆくことは、東海道を旅していることなのであった。だから、ひとつの場面はあまり長く描かず、次々に場面が移ってゆく。すなわち歩を進めてゆくのである。新しい土地の人情風俗が次々と描かれる。これを知る楽しみとテンポの良さを演出する趣向が場面転換で詠まれる狂歌なのである。作中に狂歌が多いことは（ことに五編まで）、旅のテンポ、すなわちこの作品のテンポのよさを

物語つてゐることもある。だから、弥次喜多の滑稽が同じ趣向の繰返しであつても長年にわたる流行を見たのである。だが、この三編にはそうしたテンポの良さは見られない。また、前記のとおり、一九の創作場面ではない箇所が多いと考えられる。これは彼自身が言う通り、実際の体験・見聞が基になつてゐるからであらう。この中山道の人情風俗に十分精通してゐない作者としては、慎重な作風にならざるを得ず、次から次へというテンポの良さには繋がらなかつた。これが主たる原因であらうと考える。

もう一つ。茶道・華道、素人芝居という『膝栗毛』中にはなかつた滑稽趣向が見られることもこの編の特徴である。『膝栗毛』においては、四編上に伊勢参りの田舎芝居役者たちの滑稽が一つの場面を爲した箇所はあるが、芝居そのものが描かれた箇所はない。三編のこの場面、芝居の模様とそれに付随する滑稽は、主人公二人が直接関わるのではなく、傍観者の立場でこのドタバタを楽しむ、という手法がとられてゐるところを見れば、主人公同様に作者が実見聞したことに多少の脚色を加えた場面であることは間違ひあるまい。茶道・華

道の趣向は、二人のキャラクターからはおよそかけ離れた趣向であり、香道体験者の一九でもさすがに考えもしなかつた趣向であらうから、これも一九自身の見聞によるものと推測できる。ただし、事実に取材したとは言ふものの、弥次喜多に茶道・華道の趣向を結びつけた点には、予想を超えたおかしみと同時に一九における滑稽趣向アイディアの減退を危惧させられることも事実である。

ところで、この編の冒頭に戻ると、場所は「爰は京と伏見との追分にて、往来賑しきところなれど、此ほどより降続く雨に人の心もしめりてもの淋しく」と物語は始まる。『膝栗毛』もそうであつたが、旅立ちにあたっては、それなりの好天が用意されてゐるべきである。ましてや本作は、旅を舞台とした滑稽本である。弥次と喜多はまさにこれから中山道の旅路へと出発するのである。にもかかわらず、あの冒頭文は暗く淋しく、明るさや賑やかさとは正反對の場面を演出する。『膝栗毛』の続編とは思われない。この状況でやがて瀬田の茶店での失敗滑稽話へと展開をしてゆく。前にも述べ

たとおり、弥次喜多の滑稽ぶりは、『膝栗毛』六編以前のバカバカしさを取り戻しているのに、である。挿絵第二図の二人は、旅合羽をしつかりと付けて肩をすばめて琵琶湖の湖岸を歩いている。顔は笠で見えないので、いつもの二人とは分かりにくい。横なぐりの強い雨足が描かれているこの絵もまた、三編冒頭部の厳しい場面背景を十二分に演出している。「緑亭可山識」すところの本編跋文に「…狂歌の口軽軽尻馬仕分て乗たる道中巧者、少も如在は中山道、東都の方へ帰り旅、花さく春の近江路や、二人りがみの路も恙なく、百里の道も事とせぬ…」とあるのとは対照的でさえある。

三編冒頭はなぜこうした暗く淋しい場面背景が設定されたのであろうか。

〈弥次喜多を江戸に戻そう〉という発想で始まった「続膝栗毛」シリーズの実質的最初がこの三編であることは、本稿において述べてきたところであり、それはおそらく事実であろうと考える。そして、『膝栗毛』『続膝栗毛』シリーズでは、主人公が通過してゆく各地の人情風俗が、その土地言葉を含

めて写實的に描かれる、という点に、大きな意義がある。それは『膝栗毛』初編の凡例を始めとして随所に語られる事実である。したがって書かれていることに大きな齟齬があつてはまずいのである。だからこそ作者一九は『続膝栗毛』シリーズの中山道を描くに当たつては、二人の旅路の正確さを期すためにより慎重になつたことは当然のことであろう。このシリーズ執筆のために彼は実地踏査、取材旅行を繰り返すのである。この三編もそうであるが「…此篇御嶽駅より東を木曾路といふなれば、排設のおもむき変化し僻地のありさま格別なるを趣向として、続五篇に彫つけるものならし」十返舎一九と自ら五編叙文で述べるように、作者が自らの見聞や体験を素材とすることを趣向とした本シリーズでは、実地踏査や取材旅行は前シリーズ以上に重要なのである。

四編叙文では、一九自身が中山道を利用した文化九年（一八一二）六月の上阪時（拙著『十返舎一九研究』一八〇頁）に見聞・体験した事を五編に記す旨を自ら書いている。そして五編には叙文・口絵に続いて作者の断り書きがある。

此篇上之巻は加納駅より伏見にいたり下之巻は伏見より

大久手宿にいたりて終る、去年四篇に予か軽井沢泊の夜東都より帰る萬歳と同宿せしこと此篇にあて、出すと緒言の始に記したれと、聊思ふことあれは此次六編に譲りて、その事は洩らしつ、猶大久手泊に鹿をおとす穴の中へあやまりて落たりし事は、予目下に見たるを喜多八の身の上として著す事、実に此木曾路におみては他邦に異なるめつらしき事粗見聞およひたり、追々続々の趣向とすへし

とのことで、ここに本シリーズの一九の方針は明らかに述べられているのである。そして六編の再叙にいたる。
 就中この木曾路は言すべて拗音にして上声多けれど、
 山 是は筆にあらはしがたく、只鄙言方語をその俣にて、今年統六編の趣向を編りぬ、稿成て後、信州松本の何某より、予がかたにいひおこせたるは、去年五編の著述殊に俚言のひたるよしを記して、土人の風俗癖あることまで、精く書おこせたるによりて、予猶去年初秋の頃より思ひたちて、信州善光寺に参詣し、所々に遊歴して、是彼を見聞せしに、松本の人のいひおこせたると符合するはな

はだおほし、仍てこの次七篇には、目下予が聞おほえたる俣を委すべしと、今よりその理を述る事しかりである。言うまでもなくここには、本シリーズにおける一九の執筆姿勢が強調されて記されているのである。彼の写実を求める姿勢と当地の読者に対する神経細やかさが如実に示された文章である。

ここまで述べれば、本シリーズにおいて実地踏査や取材旅行が作者にとつていかに重要であるかがわかる。逆にいえば、このシリーズで舞台となる中山道や美濃・信州の実情に作者が疎いということでもある。だから実体験や見聞に及んだことを主人公に託しての著述になるのである。

しかし、三編冒頭は「続膝栗毛」シリーズの実質的始まりであることは、既に述べてきているところであり、そのことを作者が意識しているのであるから、ここは、彼が体験した事実は雨中の出来事であつたかも知れないが、やはり冒頭にふさわしい表現で始めることが常套的手法であろうと考え。一九自身の性格からして彼はこうした「特別な」箇所において常套的手法を採る事は極めて当たり前のこととして捉

える人物であると思われる。にもかかわらず、それを覆すような舞台背景の設定となつてしまつた。

かなり未知の要素がある街道を舞台とする「続膝栗毛」シリーズに踏み出す一九は、主人公の二人以上に不安や緊張感を抱いていたに違いない。そうした不安は、二人の晴々しい出発を描くには重すぎたのではなからうか。彼の不安は晴々とした出発風景よりも、暗く淋しい風景となつて表れたのである。それがあの冒頭だろうと推測をするのである。

また、木曾路は東海道と比較すれば、雨や曇りが多いという印象がある。それは海辺に近く明るい東海道と、内陸で山中が多く暗い木曾路の印象の比較でもある。この印象の違いは、一九時代の人々にもあつたのだろうか。当時の人々がそうした印象を持つていたとするならば、その印象の違いを一九が冒頭箇所ですべて暗示をしたということは十分に考えられる。

ここで、三編の挿絵に触れておきたい。

三編の挿絵と画賛を順に上げれば次の通りである。第一回は近江八景を描いた遠景図（見開き）に「近江八景 松の木

の腹に生ひたる夢や見んからさきの夜の雨にねつきて 十返舎」の賛がある。第二回は風雨の強い大津・草津間の場面図（見開き）。旅合羽姿の二人と蓑に杖の一人が描かれる。「せら母

坂くもと見るときしくれけり 五片舎半九」の賛あり。第三回は草津宿遠景図（半丁）。「うら若き草つに駒のいはふなり 一河」の賛あり。第四回は草津の旅籠屋で弥次が風呂焚きの女と会話を交わしながら入浴をし、喜多がその様子を覗う場面図（見開き）。「ひと声は耳をつきぬく時鳥矢炮風呂に入

なからきく 感和亭鬼武」の賛あり。第五回は草津の旅籠屋階段から落ちた喜多を描く場面図（見開き）。「狂言のあたりまへなるわるじやれにどつとをちくる二かいさんじき 立川葎石」の賛あり。賛とともに「○此とりこみの中にてちよと御ひろう申上候 本町二丁目ゑどざくらと申すあぶら見せこのたびあらため大やすうりいたし候何とぞ御とりたて御ひいき奉候希上候とこれはさくしや一九の口上」がある。《以上上

巻》。下巻は第六回から始まる。武佐宿の先、水花という相の宿で草籠を背負う木賃宿の主人と弥次喜多とが出会う場面図（見開き）。「噺の訝わたるや花うつ樹 浪華百堂」「ほと、き

すいつてき水の音すなり。堂寫浪甫」。「ふせ鏝の下行木曾の杜宇 青梁」の賛あり。第七図は木質宿の囲炉裏脇、この家の亭主と女房、弥次が描かれる場面図（半丁）。「しら雲につ、む枕によふこ鳥 堂寫米彦」の賛あり。第八図は摺針峠からの風景図（見開き）。「摺針峠 ほと、きす声もすりはり峠哉 式磨」。「卯のはなに寢覚ぬざとはなかりけり 芦陰舎竹齋」の賛あり。第九図は鳥居本宿の遠景図（見開き）。「愛相に花をかざりし言のはもなきはかれ木のきちんとまりか 緑亭可山」の賛あり。第十図は番場宿の禅門の隠居宅、活花の滑稽な場面図（見開き）。「ざらざらと手さはりあらし夜具ならでさむさに肌は醒が井の宿 桜花亭金丸」の賛あり。第十一図は前図の続きで茶の湯の滑稽場面図（見開き）。賛はなし。第十二図は喜多八らしき人物と駕籠かきの後棒との会話場面の図（半丁）。賛はなし。第十三図は村芝居の最中に虎ならぬ狐がとび出して大混乱をするという滑稽場面図（見開き）。「虎拳おもひか外のきつねには何と庄屋もこれはめいわく 語友」の賛がある。全部で十三の挿絵があり、風景図が四図で場面図が九図という分類である。この絵柄の割合は、『膝栗毛』

の東海道中における割合と近いものがあり、この点においては『膝栗毛』と同趣向であると言えよう。『続膝栗毛』の挿絵から見てこの三編が「続膝栗毛」シリーズの実質的最初の編であることが言えるだろうか。注目は画賛者である。一九自身が第一図の画賛者になつてゐることから始まり、五片舎半九・一河（東寧舎一河）・立川葎石は一九が主宰する茶番狂言の「十返舎社中」のメンバーで、一九の弟子筋にあたり、彼の周辺の人物たちである。感和亭鬼武は、一九の極めて親しい友人で戯作者。ちなみに本編の口絵画者である喜多川月磨も同様であるし、同じく喜多川式磨は月磨の弟子で、一九とも親しい間柄である。彼は第八図の風景図の賛者でもある。下巻第十図の桜花亭金丸は、一九と同じ千秋側の狂歌師で、一九とは『南総記行 旅眼石』（享和二年刊）以来の交友がある。第九図の緑亭可山は、言うまでもなくこの編の跋文を書いており、その他にも本六編の序文・四編の跋文を始めとして、画賛や他の一九作品の跋文・画賛を記しており、これも一九との親しい関係を窺うことができる。第十三図の語友は不詳であるが、以上記した人物たちはいずれも一九の

身近にいる人物で、彼らは『藤栗毛』の画賛も多くものして
いる。そうした観点で見れば、この編の「特別さ」が考えら
れるのであるが、彼らは「統藤栗毛」シリーズにおいて、初
二編も含め後の編に至るまでよく顔を出す人物たちである。
したがって、一九の身近にいる人物が多いからといって、そ
れをもって最初の編であるということは不可能である。

しかし、ここで注目したいのは、右にあげた人物以外の画
賛者である。すなわち、第六図の浪華百堂・堂寫浪甫・青梁・
堂寫米彦・苜陰舎竹齋の五人である。このうち、青梁は未詳
であるが、百堂は、大阪の人。田辺氏。名は敬明、字子玄、
通称五郎兵衛。歩々齋、苜陰二世、夜半亭三世と号した人物
で、米商人であった。浪甫は大坂堂島の俳人。米彦も同様で
あるが、その号から米商人であった可能性が高い。苜陰舎竹
齋は、大阪の人。浪甫の門人。四世苜陰舎。百堂と浪甫・竹
齋は同門の俳人であり、米彦も彼らと同じ堂島の俳人である
から友人知人の関係にあったと考える。また未詳の青梁も彼
らと並んで画賛の句が添えられているので、大坂堂島辺の俳
人であった可能性はかなり高いであろう。このように、三編

の画賛者の中で、一九周辺の人物と並んで大阪の俳人が顔を
揃えていることは、特徴的である。ちなみに「統藤栗毛」初
二編および四編を見ると、ほとんどが一九周辺の人物であっ
て、三編のように大阪の俳人が揃って出ていることはない。

このことは、一九が大阪滞在中に知り合ったかあるいは世
話になったかした俳人の画賛を三編に集中的に出したとい
ことを示している。平成十八年十二月に永井一彰氏によって
紹介された一九の自筆書簡は、『藤栗毛』五編執筆に際し、そ
の取材に多大な協力を仰いだ三河・尾張の文人たちへの礼を
兼ねた賀状で、宛名は当地の文人仲間を中心的存在である神
谷剛甫（狂名、椒芽亭田楽）である。この書簡中に「先々御
蔭を以当春之ひさくり御地之御通人方江御付合申候故二出来
仕右御礼讀書丸として御名前御銘々相しるし置申候御代歌不
出来は御用捨可被下候」（解説、永井氏）とある。ここには、
『藤栗毛』五編が皆様のお蔭で出来たことの礼が述べられ、一
九自身の作歌をお世話いただいた方々の作としてその名前と
ともに作中に載せる旨が記されている。ここに記されたこと
は、『藤栗毛』中の画賛は、実は一九自身の作で、作者名は一

